

報告 1◎

祭文と儀礼の視点から 「金神の祭文」をめぐって

斎藤英喜 佛教大学歴史学部教授

『資料集・いざなぎ流研究の現在と物部フィールドワークの12年』の中に「祭文と儀礼の視点から——「金神の祭文」をめぐって」というのがあります。先ほどの小松先生のお話にあったように、いざなぎ流の祭祀、呪術は、この祭文というものが中心です。いざなぎ流のお祭りや、儀礼、祈禱は祭文ぬきにはないんですね。そのことを、太夫さんからこういう言葉で聞きました。祭文というのは、結局おとぎ話みたいなものなんです。そういうおとぎ話みたいなものを読んでもしよがないといって、祭文を馬鹿にしていた太夫がいるんですが、そういう太夫さんは、病人祈禱をやっても失敗する。それに対して、この伊井阿良芳太夫さんという、先ほど小松先生の写真に出ていた方ですが、この伊井さんは、祭文を読めばどんな病気でも治せると言います。非常に自信を持っておっしゃっていて、いざなぎ流の儀礼や祈禱の中で祭文がいかに大切かということが、この言葉からわかります。

ところが、この祭文だけでは儀礼やお祭りは執行できません。祭文を読んだあとに太夫さんが、この祭文を元にして、どういう効果がこのお祭りで必要か、どういう具体的な役割が必要かということを、祭文に付け足す部分があって、それを「りかん」と呼びます。または「読み分け」とも呼びます。このりかんというのは、祭文の書物には書いてありません。まさに口で唱えるものなのです。この「りかん」がすらすらと言えるようになると、太夫として一人前であるとなります。実際の儀礼をじかに見ていると、これは毎回毎回違っています。ですから、祭文が重要ではありますが、祭文に付け足す「りかん」、これが非常に重要だというわけです。これは儀礼の現場で、耳をこらして聞いてみないとわからないものです。

さらに、祭文だけでなく、「ほうもん法文」があります。祭文というのは、言葉の通り神を祭るものです。神社の神主さんの祝詞に当たるものです。これに対していざなぎ流の「法文」では、この祀られている神様を「使役する」ことになります。陰陽道でいう「しきがみ式神」に当たります。神様を自分の家来として使役するのです。

祀られている神様を使役することを、「式の行ない」とか「式王子」というふう
にいます。祭文に対して、この法文というものを唱えることによって、「山の
神の祭文」で祭られる、山の神という神様は、「山の神のさわら式」や「山の神
のけみだし式」という法文によって「式」となります。「天神の祭文」というの
は非常に重要なのですが、この場合は天神というの是一般の菅原天神ではなくて、
鍛冶屋さんの先祖の神を天神というのですが、鍛冶屋さんの神を祭るときには、
この天神の祭文を読んで祭るのです。これに対して法文は、「天神の吹きみだし
の裏式」とか「天神のまご打ちの法」とか、「天神の血花くづし」というのが
あります。名前がおどろおどろしい感じがするのは、まさしくこの法文というの
が、いわゆる「調伏^{ちようぶく}」といってるような呪いに使ったりするものだからです。あ
るいはその中の一部分を取り出して病人祈禱に使うこともできます。この祭文と、
「りかん」と、法文。これらがいざなぎ流の太夫たちの儀礼のいちばん基本であ
るといえます。

先ほどからご紹介いただいたように、僕が「弟子入り」した中尾計佐清^{なかおけさきよ}さんと
いう長老の太夫さんがいらっしゃいました。最後の「許し」のところはもらえな
かったのですけれども、この方からいろいろ教えていただきました。その太夫さん
がこの祭文と法文を非常に厳密に分けるのです。祭文の中に、この式法の元が
あるわけですが、計佐清さんはそれを厳密に分けて、祭文帳と法文は絶対に混ぜ
ません。覚え書の帳面には祭文は祭文だけ。法文は法文だけに分けて、絶対にご
ちゃ混ぜにしない。このことが非常に重要だというわけです。これを計佐清さん
の言葉では、「表の中に裏あり、裏の中には表はありません」と説明します。そ
ういう祭文と法文の関係があります。

祭文や法文は、いざなぎ流ではあまり古いものが残されていないといわれてい
て、それがいざなぎ流の歴史研究を非常に困難にしているところです。なぜ古い
ものがないのかということについて、中尾計佐清さんが言うには、太夫が生きて
いるうちは自分の祭文をちゃんと管理できるが、自分が死んでしまうとその祭文
や法文を管理できなくなってくるので、それを残しておく自分の家族に災とな
ってしまうというのです。そう考えて、自分が太夫をやめて亡くなるときには、
その祭文帳を全部焼いてしまうとか、地中に埋めてしまうとかして、処分してし
まうのです。

そういう土地ですから、文献として残すという発想がありません。これも近代
のわれわれの考えからいうと、そういう古いものは残しておいてほしいと思うの
ですが、残しておいてはいけないというのです。つまりそういう祭文や法文は、
本当に太夫のこの祈禱や祭祀の実践に結びついたものであって、それと密接につ
ながっている自分だけのものであると、こういう意識があるのです。そういうこ
とを僕は中尾計佐清太夫さんから教えていただきました。それは、先ほど小松先
生からいわれたように、一人の太夫についてしまうと、深くはわかるんですが、

デメリットもあります。たしかに、計佐清さんはほかの太夫の話も聞いてこいというんですね。もっと勉強するためにほかの太夫の話も聞けと。それでほかの太夫さんに聞きに行ったりすると、なぜか聞きに行ったという情報が漏れているんです。それで、計佐清さんがいやな顔をするんです。聞きに行きなさいといったけれども、いやな顔をする。

そういう関係の中で、僕にとってのいざなぎ流は、この中尾計佐清さんのいざなぎ流の世界を学んだのです。それで先ほど紹介いただいた『いざなぎ流 祭文と儀礼』の本でちょうど僕のいざなぎ流の研究は完結しました。だから僕の「いざなぎ流」の研究はこれでもう終わったのですが、そのあと小松先生の大著が出て、いっぽう僕自身も、古代・中世・近世の陰陽道の歴史を研究する中で、いざなぎ流が結局どういう位置にあるのかと考えています。いざなぎ流は民間の陰陽道と漠然といわれていたのですが、近年林淳さんや梅田千尋さんが近世陰陽道の研究を非常に進められていて、「いざなぎ流」を単純に「陰陽師」とはいえなくなり、そういうものが一方にあり、小松先生の大著が一方にあって、僕自身は計佐清さんから学んだいざなぎ流の世界をどういうふう^に歴史の中に位置づけられるかということが、今後の課題として追求しているところです。

さて、次のところは、「^{こんじん}金神の^{さいもん}祭文」という祭文の話に移ります。これは今まであまり注目されていないのですが、その「金神の祭文」というのは、陰陽道の^{こんじん}金神信仰といういちばん有名なものなのです。これを分析してみると、まさしくその陰陽道の中の、金神信仰の一端である、^{ほきないでん}『篋簾内伝』という本につながっていることがよくわかります。詳しくご説明する時間はありませんが、中尾計佐清本「金神方位の神祭文」(吉村淑甫監修 斎藤英喜・梅野光興編『いざなぎ流祭文帳』)の[A][B][C]の部分を見ると、この『篋簾内伝』の世界とよく対応していることがわかります。まず、[A]部分と『篋簾内伝』[資料1]を比較してみます(以下、下線は筆者)。

[A]

天神七代の御世に いでき始まる神に候え供 糸と日の定め無いとて から
天竺神段国より婦夫共諸供 天や降らせ給ふて すみせん(須弥山)山の
ふもとに たがいをなされた 其の御時五人の王子をうませ給ふて 太郎の
王子は 東々方六百世界の王とも そなわり給ふた其の御時に 御子が十人
あらせられ給ふて きのえきのと(甲乙) ひのえひのと(丙丁) つちの
えつちのと(戊己) かのえかのと(庚辛) みづのえみづのと(壬癸)
と ならせ給ふて これ十かん(干)と 取り納め給ふ 次郎の王子は 尺
大滝王(赤帝龍王)と申して 南々方六百世界の王とも そなわり給ふた其
の御時に 御子が 十二人あらせ給ふて 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未

申 酉 戌 亥とならせ給ふ 是レ十二中(支)の王と 取納め給ふ 三郎王(子)は 西西方白大滝王と申して 六百(世)界の王ともそなわり給ふた其の御時に 御子が十二人あらせ給ふて たつ(建) のぞく(除) みつ(満) たいら(平) さだむ(定) とる(執) やぶる(破) あやうい(危) なる(成) おさむ(納) ひらく(開) とづ(閉) とならせ給ふ これ十二中(直)の王と ならせ給ふ 四郎の王子は 国大滝王(黒帝龍王)と申して 北北方六百世界の王とも そなわり給ふた 其御時に御子が九人あらせられ給ふて 一とく(徳) 二き(氣) 三き(氣) 四せつ(節) 五き(氣) 六かい(回) 七用(曜) 八なん(難) 九用(曜) となり給ふ 五郎の王子は王たい滝王(黄帝龍王)と申して 空中六百世界の王とも そなわり給ふた 其の御時に御子が四十八人あらせ給て 四せつ 土用 きけめ 四十八性に 取納め 給ふ 月に大小 日食 月食 春 夏 秋 冬 の四き(季) 耕作 草木の芽に至るまで 三千世界を 取り納給ふた

[資料1]

第一妻女ヲ伊采女ト号ス。シカラバ青帝青龍王ヲ生ミ、春七十二日ヲ領ス。愛金貴女ヲ妻トシ、十人ノ王子ヲ生ム。所謂ル甲乙丙丁戊己庚辛壬癸。

第二の妻女・陽専女。赤帝赤龍王の誕生。夏の七十二日を領有。愛昇焰女と結婚。十二人の王子誕生。→「十二支」に配当

第三の妻女・福采女。白帝白龍王誕生。秋七十二日を支配。愛色姓女と結婚して十二の王子誕生。→「十二客(直)」に配当

第四の妻女・癸采女。黒帝黒龍王誕生。冬七十二日を支配。愛上吉女と結婚して九人の王子誕生。→「九凶」に配当

第五の妻女・金吉女。黄帝黄龍王誕生。四季土用七十二日を支配。愛堅牢大神と結婚して四十八人の王子誕生。→「七箇善日」に配当

(『簞籩内伝』卷二)

以上のように両者のあいだに「暦神」の起源として共通していることがわかります。

さらに、次の[B]の部分を見ますと「金神」の誕生を語っていますが、これが非常に不思議なのは、この金神を倒す主体が、八坂神社の八王子宮の神様だといっているところです。

[B]

其の御時に南方り(万里)と申す 大悪神 金神七節と申す 者がいでき 始まり 日本の水をすいほし(吸 干) 大万尺の岩を 小沙にみだし 千

材小木を ちりにたおし 高き山をわ ひろくに 貫きならし 天地をく
つがえし 人間に 血花を切りかけ たゞ一日に七人づつ取りころし 国土
のさをぎ(騒) なにとも なさうようもないとて 八坂の神社 八王子宮
大ばん権のあらそん 九十七社の きんたち 八王子宮様が うちたいらげ
丑寅き(鬼) 門え うち納め給ふ これより国土あきらか なんと申すも
其のいんねん(因縁)なり 丑寅き門と申すも其のいんねん 二よい方中
(如来法珠)の神とあらわれ 万方の方(宝)をぶらし(降らし)給ふ 八
坂神社わ 文部のすへつき王子に 栄えのためとて 出雲の国にてきづき
(杵築)大明神と そなわり 金神の道を 縁組と申すも 其のいんねん
御きさきわ 春るざいこねうじ(はりさい女) いなだ(稲田) 姫は 年徳神
とそなわり 給なり 是レ天竺じんだん国は 我が長(朝)までも 国土あ
きらかなると申すも 此の御事なれば 此の五りへき(御利益)を申す と
云う事 なし 年々あきらかに たんとみ(尊ぶ) 奉る小上(衆生)のとも
がらわ しんとく 大地家内天に 銀の花が咲き 地に金のこのみ(木の実)
をぶすみ もろへの 遠き くらき事なし 天が下 たいらかに 国土安
全 五石(穀)じようじゆ(成就)さいし(妻子)けんぞく(眷属) 牛馬
六ちく(畜)けら安全 たゞにようりつ(如律) おしあわせ つっしんに
敬白 国土の祭文読や開くと云う事 ちようない事にて候へ供も

これがなぜ金神を倒したかというのは、これも『簠簋内伝』[資料2]を読む
と、八坂神社(祇園社)の祭神である牛頭天王こずてんのうという疫神が倒す巨旦大王こたんだいおうという
のがでてくるわけですが、どうやらそれと対応していることがわかります。

[資料2]

金神七殺ノ方(以下略)

右、コノ方ハ無数ノ悪神ノ中ニ最モ最大一トナス。巨旦大鬼王ガ精魂、七魄
遊行シテ南閻浮提ノ衆生ヲ殺戮スルナリ。モシ人、推シテコノ方ニ向ハバ、
則チ家内ニ七人死ス。若シ家内ニソノ数無キハ、則チ隣家ノ人ヲ以テコレヲ
加フカ。コレヲ風災ト名ヅク。金ハ肺ヲ収メ七魄ヲ具ス。万物ヲ断破ス。故
ニ最モ凶トスベキナリ。 (『簠簋内伝』卷一)

以上のように巨旦大王が『簠簋内伝』の中では、牛頭天王に倒された巨旦大王
が金神のことであるというふうの説明が出てきます。ですから、その巨旦大王を
倒す牛頭天王がすなわち、八坂神社の八王子宮の神であるとなるわけです。面白
いのは、八坂神社という名称は近代以降のもので、中世・近世では祇園社なので
す。ここでこの八坂神社という名が出てくるのは、計佐清さんが伝えているこの
「金神の祭文」が、どうやら近代の神仏分離以降の八坂神社という名称に変わっ

てからのことだということがわかるのです。

さらにもうひとつ、これも不思議なのは、この [B] の部分に関わって、八坂神社のこの八王子宮が出雲の杵築大明神^{きづきだいみょうじん}であるとでてくるところです。これはこの牛頭天王すなわちスサノヲであるとされているこの神様が、なぜ今度は出雲の杵築大明神なのか。これを中世の神話の中で見ていきますと、中世神話の世界ではこの出雲の杵築大明神というのがスサノヲのことなんですね。出雲大社の神様はオホクニヌシですけれども、この中世神話においてはスサノヲであるというのがわかります（詳しくは拙著『荒ぶるスサノヲ、七変化』吉川弘文館、2012を参照）。ですから、この部分ではこの八坂神社の八王子が出雲の杵築大明神であるということが、その中世の出雲信仰の世界とつながってくるということがわかります。とても複雑な話になりましたが、この「金神の祭文」を見ていきますと、中世、近世、さらに近代の歴史の中でいざなぎ流の祭文がどのように変貌してきたのか、そういうことがわかるのです。

さらに、この「金神の祭文」の [C] の部分、これが「りかん」です。

[C]

(コレカラサキハ病人祈り) 何の年玉 (の) 病者に しのびきたる 悪魔の者 立ちのき申さず 此の祭文読みやかんじよう (勧請) 申しまいらする 八坂神社八王子宮 九十七社のきんたちを 奉レ行 八億九万七千五百の悪神金神七節 さよだに たいぢん めされ給ふ 此の御神ぞ 何ノ年玉の病者にしのびきたる 悪魔わ したがい申さば いともやすき事にて候 たんてき したがい給へと行申す金神七節の祟りがある供 身はだを許いて元の定めた 方角丑寅き門が方へ たいめん つうんしん 御元え鎮り給へ (中略) 日月月日の將軍様 かしま (鹿島) の神 おわらんぎら (限ら) つうんしんに鎮り給へとおそれみおそれみ 申しまいらする ㄨ

計佐清さんがおそらく病人祈禱で使ったときの「りかん」を文字にしておいたものと思われます。その [C] の部分の発想について、中世末期の土御門家が伝えてきた次の祭文の中に、やはり金神の忌みに対する部分を見ることができます。

維日本国天文九年歳次庚子二月七日庚午

吉日良辰 [主人]

斎誠沐浴謹遣有司奉設礼奠／謹請東方青帝土公神／謹請南方赤帝土公神／謹請西方白帝土公神／謹請北方黑帝土公神／謹請中央黄帝土公神／謹請五土將軍。五土諸神。土姥土家子孫土府

官属〔某〕謹以吉日斎潔奉設清壇。百和名香。五綵錢絹。黍稷。淳醴菹脯。菓羞豊潔。

至誠奉請惟垂降臨所献尚饗 〔再拜〕

謹テ五方土公五土將軍五土諸神ニ啓ス。〔主人〕領掌此

(欠字) 管作。而間或工近喧嘩。斤斧動作。構垣

(欠字) 濁犯靈地。或ハ大歳大將軍遊行之方ヲ犯ス。

(欠字) 歲月日時神教之地。或ハ禍害絶命墓絶ヲ犯ス

(欠字) 若ハ八卦九宮禁忌ヲ犯ス。行年本命祭ヲ犯ス。

(欠字) 又五星之月ニ当リテ、五星之方ヲ犯ス。又禁忌之日ニ当リテ、禁忌之方ヲ犯ス。或ハ歳破ノ所在ヲ犯ス。或ハ歳刑厭呑ノ所在ヲ犯ス。若ハ渠海壁落之土ヲ犯ス。若ハ井竈干湿之地ヲ犯ス。又ハ土府伏龍地脈水息之官ヲ犯ス。又ハ大小道路諸神遊行之處ヲ犯ス。或ハ**金神七殺之方ヲ犯ス**。或ハ九星凶色之方ヲ犯ス。斯如キ過失、勝計スベカラズ。シカノミナラズ日ヲ擇ビ時ヲ選ブ之刻、皆次日之禁殺ヲ知ラズ。誠ニ明師ノ教諭ニ預ルト雖モ、猶ハ鬼怒ノ身ヲ犯スヲ恐レ、抑モ過謝祈ル。是レ善ニ歸スノ道ナリ。鬼ヲ敬シ神ヲ礼ス。又惡を攘フノ法ナリ。伏以、寿福ノ至リ、祈ト祈ラザルトナリ。災禍、コレヲ去ル……

(土御門『祭文部類』「土公之祭文」天正九年(1581)、『陰陽道基礎史料集成』(村山修一著、東京美術、1987)所収)

これも病人祈禱で読まれたことが推定できる部分があります。近世の土御門家、つまり官人陰陽師の中では「金神」信仰のもとになっている『篋篋内伝』は、自家とは関係がない書物であると否定しているのですが、それがこのようにとりこまれている土御門家の祭文もあるわけです。

今後のいざなぎ流の課題は、いざなぎ流の太夫や、祭文や儀礼が、中世・近世の歴史の中でどのように位置付けられ、それがこの高知の物部で、どのように変容してきているのか。そういうことを明らかにすることが重要です。

[さいとう ひでき]